

3 発掘調査の成果

(1) 史跡下布田遺跡における晩期集落の概要

史跡指定地内では、縄文時代晩期の遺構として、方形配石遺構 1 基、合口土器棺墓 1 基、配石埋葬墓 1 基、石棒集積遺構 1 基、土坑、小穴群が検出されている。検出遺構は東西約 88 m、南北約 50 m の範囲に広がるが、分布状況に明確な傾向は認められない。また、これまでのところ竪穴住居跡などは確認されていないが、過去の調査は何れもトレンチ調査で、未調査区域が多いため、今後の調査によって、居住関係遺構が確認される可能性は十分考えられる。

史跡地は立川段丘縁辺部から多摩川沖積低地にかけて立地し、地形的には台地部と崖線斜面部～低地部に大別される。更に台地部は、史跡地を北西方向に切り込む浅い埋没谷を境に、南西側の低位面と北東側の高位面に細分される。地形区別に遺構の分布状況をみると、段丘低位面では、高位面との境付近で方形配石遺構、焼土跡が、史跡地西端部付近からは石棒集積遺構が検出されている。また、方形配石遺構の南から南東側には遺物集中域が広がり、その下層から土坑、小穴群、焼土跡が検出されている。一方、段丘高位面では、低位面沿いに合口土器棺墓、配石埋葬墓、土坑などが検出されたほか、遺物集中域が確認されている。高位面には、下布田古墳群のうち 1 号墳・2 号墳・14 号墳が所在するうえ、

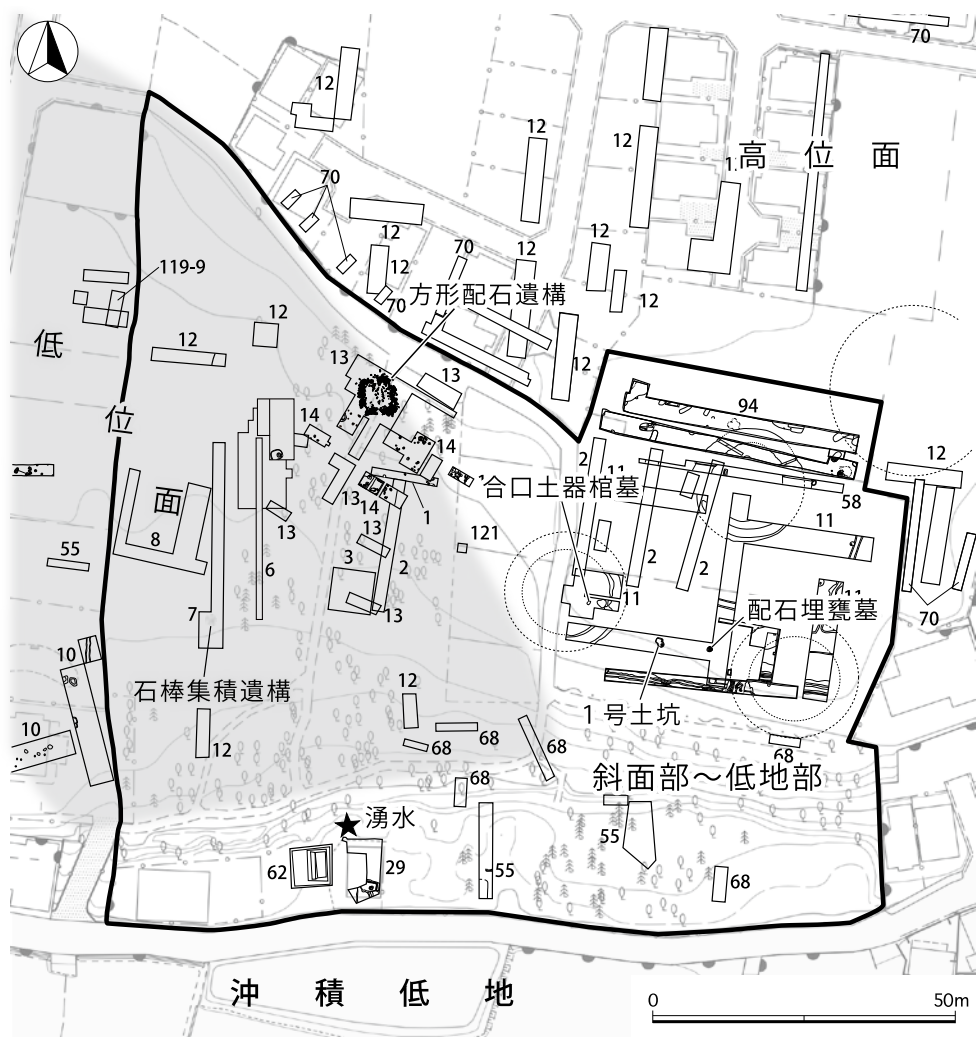


図 13 縄文時代晩期の主な遺構分布図

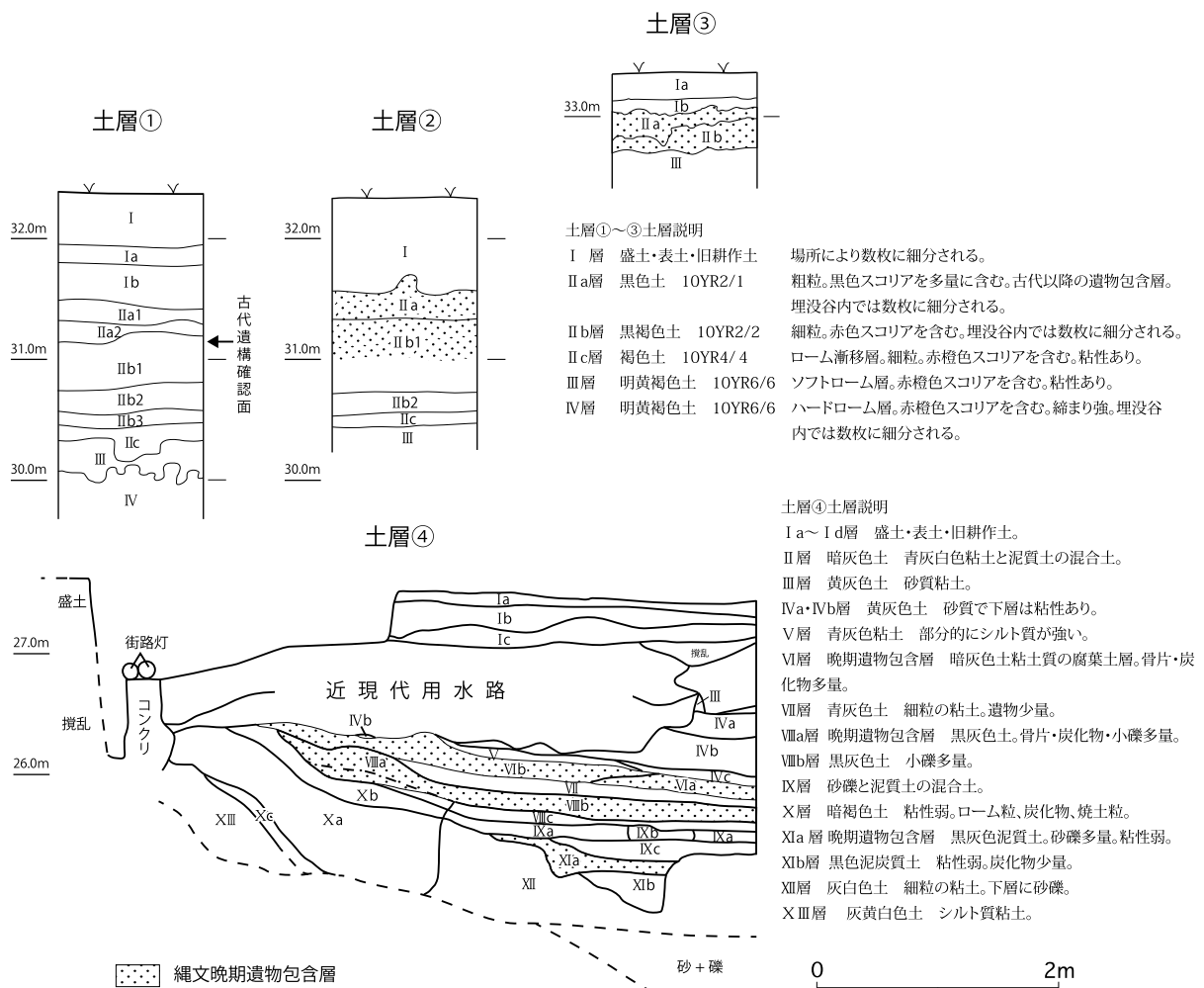
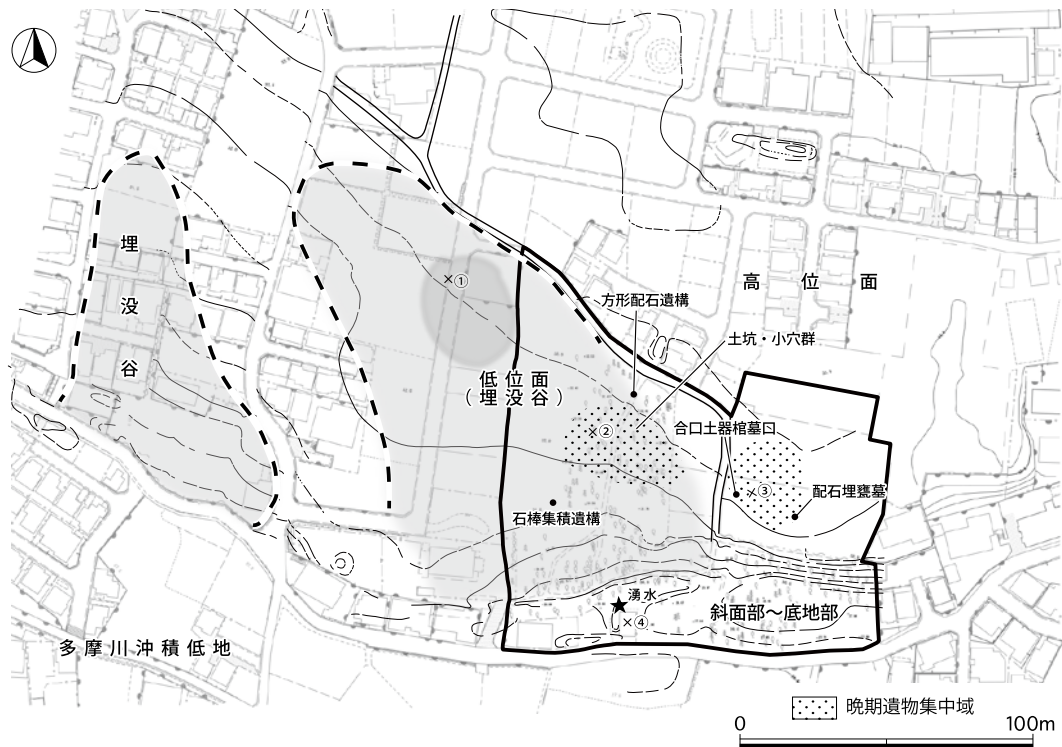


図 14 史跡周辺の基本層序柱状図

戦時中に照空隊陣地が設営された影響か、遺構の遺存状況はあまり良くない。

これに対して、崖線斜面部から低地部にかけての区域では、縄文晩期の遺物包含層はあるが、これまでのところ遺構は確認されていない。ただし、史跡地から東約 250 m の多摩川低地に立地する染地遺跡第 26 地点の調査では、古代の遺構確認面の下層より、下布田遺跡と同様、安行 3c・3d 式土器を主体とする縄文晩期の遺物包含層が確認され、配石遺構や焼土跡を伴う土坑、晩期遺物集中域などが検出されている。縄文時代晩期における低地利用を示すものであり、下布田遺跡においても同様に低地利用が行われていた可能性は高いと思われる。

(2) 史跡地の基本土層

史跡地内の基本土層について、地形区分ごとに概観する。

段丘高位面の基本層序を見ると、縄文時代晩期の遺構・遺物の分布が薄い史跡範囲北東部では、表土・耕作土、Ⅱ a 層（黒色土層）、Ⅱ b 層（黒褐色土層）、Ⅱ c 層（ローム漸移層）という標準的な層序であるのに対して、遺物集中域が検出された低位面沿いの区域では、表土・耕作土直下に縄文時代晩期の遺物包含層の堆積（Ⅱ a 層）が認められる。この遺物包含層は上下 2 層に細分され、上層は炭化物や焼けた獣骨片を多量に含む締まりの弱い黒色土・黒褐色土なのに対して、下層は上層に比べるとやや明るい暗褐色土で、いずれも平均 15～20cm の層厚を測る。遺物包含層の下は、場所によってⅡ b 層の堆積が若干認められるが、基本的にはⅡ c 層（ローム漸移層）もしくはⅢ層（ソフトローム層）となる。

段丘低位面の基本層序は、晩期の遺構・遺物がほとんど検出されていない史跡範囲北西部、埋没谷の深い部分では、Ⅱ a 層、Ⅱ b 層が厚く堆積し、ローム漸移層、ソフトローム層となるのに対して、遺物集中域が検出された史跡範囲中央部、高位面との境付近では、やはり表土・耕作土直下に晩期遺物包含層の堆積が見られる。遺物包含層の下は、場所によってⅡ b 層を挟む場合もあるが、そのままローム漸移層もしくはソフトローム層となることが多い。

崖線斜面部から低地部にかけては、既往調査の結果、崖線下を旧流路が西から東へと流れていたことが明らかになっている。旧流路は下層に粘土層と砂利層が互層をなして堆積し、その上に黒色シルト質粘土の晩期包含層が 3 層確認されている。更に晩期遺物包含層の上層には古代の遺構確認面があり、黄灰色粘土層が堆積している。低地部で確認された遺物包含層のうち上位 2 層は、その堆積状況から見て、段丘上からの流れ込み、もしくは流路によって上流から流され堆積した可能性が高いが、最下層については比較的安定した平坦面を形成していることから、生活面の可能性が想定される。また、埋没谷の開口部直下には等高線の乱れが認められ、人工的な土地の改変、例えば水場遺構が存在する可能性も指摘されている。

(3) 発掘調査で検出された主な遺構

これまでの調査で検出された遺構のうち、下布田遺跡を特徴づける主要な遺構として、方形配石遺構、石棒集積遺構、合口土器棺墓、配石埋甕墓などが挙げられる。これら主要遺構の構造や出土状況については以下のとおりである。

① 方形配石遺構

史跡範囲の西北部、段丘高位面と低位面の境界付近の緩斜面に位置する（第13地点）。人頭大の河原石を、幅60～150cmの帯状に配石したもので、全体の平面形態は隅丸長方形を呈し、長辺6.5～7.0m、短辺6.1～6.5mを測る。配石状況にはある程度規則性が認められ、群あるいは列の両端を横位の礫で区画し、区画内を立石もしくは斜位の礫で充填している。攪乱により部分的に配石列が途切れる箇所が見られるが、本来、帯状の配石列が全周していたのか、いくつかの配石群が集合したものであったのかは更なる検討が必要である。礫は長楕円形のものが大半で、大きいものは40～50cm、重量は7～10kgと、形や大きさについて斉一的な選択が行われたものと考えられる。使用された礫の数は650～800点と推定されている。配石下部については未調査のため、下部構造の有無は明らかではない。平成30年度の調査の際、配石列を切り込む攪乱の壁面において、配石下部の堆積状況を観察したが、土坑状の掘り込みなどは認められなかった。出土遺物として安行3c式新段階から安行3d式等が確認されている。

方形配石の中央部には、周縁部に40～50cm程の河原石16個を配置した土坑状遺構が検出されている。平面形態は長楕円形を呈し、長軸2.3m、短軸0.6mを測る。主軸は配石列と近似する。市教育委員会が昭和56年度に実施した調査では、この土坑状遺構の覆土中から完形の石刀が出土していることから埋葬施設の可能性を想定している。しかし、この土坑状遺構は輪郭や立ち上がりが明確でなく、掘り込みの有無については疑問が残る。また、副葬品とされる石刀も、遺構確認面付近からの出土であることなどから、土坑との関係は明らかでなく、再検討が必要である。

本遺構については、従来、埋葬施設もしくは祭祀施設とされてきたが、前述のとおり、配石下部の状況が明らかでないことや、中央部の配石土坑について掘り込みを伴うのか伴わないのかなど不明な点が多く、遺構の性格は確定できていない。



方形配石遺構（左：遺構全景 右：配石状況）

② 石棒集積遺構

史跡範囲の西端部、段丘低位面の中央付近に位置する（第7地点）。土坑状の掘り込みに大型石棒10数点、大小40数個の河原石などを集めたもので、平面形は不整五角形を呈する。規模は長径175cm、短径135cm、確認面からの深さは約10cmを測る。大型石棒や河原石のほか、縄文土器（大洞C1式・C2式、安行3c式・3d式等）、手捏ね土器、土器の把手を再加工した垂飾り、磨製石斧、石皿、磨石、中空土偶、

土版などが出土している。遺物の出土状況から、元々は、土坑の四隅に無頭式の石棒が立てられ、その内側にその他の石棒や河原石などが立てられていたものと思われる。

本遺構が形成された時期については、出土土器の主体である安行 3c 式古段階～安行 3d 式前半段階と考えられるが、集積された石棒の帰属時期は、その形態や石材から縄文中期末から後期初頭に比定される。また、出土土器の中にも中期の勝坂式や後期の堀之内 2 式の土器片が含まれている。石棒や土器は周辺一帯から拾い集められた可能性が考えられるが、遺構の形成過程を詳細に検討することで、本遺構の性格や、遺構に伴う儀礼的行為の実態を明らかにする必要がある。なお、同様の遺構は、東京都町田市田端遺跡、同なすな原遺跡、埼玉県鴻巣市赤城遺跡、群馬県安中市天神原遺跡などで確認されており、更なる比較検討が必要である。



石棒集積遺構（左：出土状況 右：推定復元）

③ 合口土器棺墓

史跡範囲の中央東寄り、台地部高位面の崖線際付近に位置する（第 11-3 地点）。縄文時代晩期の遺物集中域の最下面から検出された。土器棺墓は、深鉢形土器 2 点を合せ口状に組み合わせて身（棺本体）と蓋としたもので、楕円形の掘り込みの中に横位の状態で埋設されている。掘り込みの規模は、長軸 87cm、短軸 48cm を測る。土器棺は押しつぶされた状態で検出されている。土器棺内部からは、炭化物や焼土とともに焼けた骨片が多量に確認されている。遺存状態が悪く、詳細は明らかでないが、乳幼児を埋葬したものと推定される。土器棺に用いられた土器はいずれも安行 3 d 式の深鉢である。



合口土器棺墓（左：出土状況 右：出土土器）

④ 配石埋甕墓

史跡範囲の東側、段丘高位面の崖線際付近で検出された（第 11-3 地点）。合口土器棺墓の西方 20.5 m に位置する。楕円形を呈する土坑内に、胴下部から底部を打ち欠いた深鉢型土器と大小 5 個の河原石が埋設されている。土坑の規模は、長軸 95cm、短軸 80cm、確認面からの深さ 30cm を測る。底面は平坦で、壁は比較的急傾斜で立ち上がる。深鉢は土坑の北隅に底面から約 9cm 浮いた正位の状態 で埋設されている。河原石は、深鉢の南側、何れも覆土下層から出土している。河原石の形は楕円形、長楕円形、不整形と様々で、大きさは小さいもので 9cm、大きいもので 27cm と、形状や大きさに規則性は認められない。配置に関しても、意図的な埋設かどうかは不明である。土器内及び土坑覆土から炭化物や焼土、焼けた骨片が多量に検出されているが、骨片は遺存状況が悪く、人骨か獣骨か明らかでない。本遺構は、従来、埋葬施設とされてきたが、墓跡とする積極的根拠は乏しく、遺構の性格は不明である。



配石埋甕墓（左：出土状況 右：出土埋甕）

⑤ 晩期遺物集中域・小穴群

段丘低位面に位置する方形配石遺構の南側一帯と、段丘高位面の合口土器棺墓と配石埋甕墓に挟まれた区域において、晩期の遺物集中域が確認されている。出土遺物を見ると、これまで史跡下布田遺跡を特徴づけてきた呪術的・祭祀的要素を示す遺物は顕著でなく、多量の無文精製土器や粗製土器、製塩土器のほか、石器製作に伴って排出された剥片や未成品といった、日常生活に由来する遺物が、炭化物や焼土、骨片とともに多量に検出されている。



晩期遺物集中域（左）・小穴（右）

史跡地内では、これまでの調査で居住施設の存在は確認されていないが、上記のような出土遺物の内容などから居住施設が存在する蓋然性は高いと考えられる。史跡内の2か所で確認された遺物集中域は、何らかの居住痕跡を示す可能性が考えられる。特に、方形配石遺構の南側に広がる遺物集中域では、その下層から径12～68cmの小穴54基が検出されている。これまでのところ小穴群の配置に規則性等は認められず、竪穴住居の柱穴など確実に居住施設と判断できるものはない。ただし、縄文時代晩期の関東や中部地方では、竪穴住居の掘り込みが浅くなるため、住居跡として残りにくく、発掘調査において検出しにくい傾向がある。トレンチ調査という限られた範囲での調査であることも勘案すれば、今後、これらの区域で居住施設が確認される可能性は十分考えられる。

(4) 出土遺物の状況

史跡下布田遺跡では、これまでに行われた発掘調査全体でコンテナ数百箱分に及ぶ、縄文土器、土製品、石器、石製品、木製品、自然遺物といった多様な遺物が検出されている。出土遺物のなかには、土版、土偶、土製耳飾、石棒、石刀、石冠、独鈷石など遺跡を特徴づける呪術的遺物も検出されているが、その大半は、深鉢、浅鉢、台付鉢など日常什器の土器片や、石鏃、石斧、石皿、磨石など日常道具とみられる石器群が占める。

縄文土器は、早期前半から晩期中葉にかけて確認されているが、主体となるのは、晩期中葉の安行3c式から安行3d式で、これと併行する東北地方の大洞式や東関東の前浦式、西日本の突帯文系土器など他地域系統の土器群が確認されている。器種組成は深鉢が大半を占める。遺構に伴うものは少なく、その多くは遺構外や遺物包含層からの出土である。また、史跡範囲東寄りの合口土器棺墓と配石埋葬墓に挟まれた区域で確認された晩期遺物集中域からは、大量の製塩土器が出土している。何れも破片資料で、器形を復元できるものはない。

石器は、打製石斧や磨製石斧、敲石、スクレイパー類、礫器、磨石、石皿のほか、剥片石器の製作に伴う石核や原石などが検出されている。石材は黒曜石、頁岩、チャート、ホルンフェルス等で、このうち黒曜石は産地分析の結果、長野県小深沢(和田峠)・星ヶ塔産、静岡県柏峠産(天城産)と同定された。

史跡下布田遺跡を特徴づけるのは多量の石鏃の存在である。石鏃は完成品164点、未成品395点、製作過程に排出されたとみられる剥片約1,300点をはじめ、石核等が検出されている。石材の多くは、多摩川の河原で採取可能なチャートで、その他星ヶ塔産の黒曜石や、黒色頁岩が数点認められる。未成品や素材剥片の多さと併せて、この地で在地の石材を用いた石鏃製作が盛んに行われたことがうかがえる。また、「飛行機鏃」と呼ばれる特徴的な形の石鏃が多量に出土しており、他地域へ供給していた可能性が指摘されている。

また、第6地点から出土した土製耳飾は、直径9.8cm、厚さ3.4cmと大型で、非常に精緻な造りの優品として国重要文化財に指定されている。土台となる部分は、薄いドーナツ状の円板と短い筒状の部分からなり、表面には透かし彫りによる環状または渦巻状の花弁を思わせる複雑で立体的な装飾が施される。裏面には装飾的要素は認められず、ヘラナデによって平滑に調整されるのみである。全体に鮮やかな赤彩が施される。群馬県桐生市千網谷戸遺跡から出土した土製耳飾と法量・意匠・質感が酷似しており、千網谷戸遺跡で製作されたものが、下布田遺跡にもたらされたものと考えられる。



安行 3c 式



安行 3c 式

安行 3d 式



大洞 C1 式



大洞 C2 式

突帯文系



石鏃 (飛行機鏃)



国指定重要文化財 土製耳飾



石劍・石刀



土版



石冠



土偶

勾玉

史跡地内では、これまで住居跡等は検出されず、居住域の存在は明らかになっていないが、出土土器における粗製土器の多さ、多量の石鏃を製作した痕跡、ニホンジカやイノシシの焼獣骨片や炭化材・炭化物など生活残滓と考えられる遺物の多量出土などを併せ考えると、史跡地内に居住施設が存在した可能性は高いと考える。

(5) 自然遺物と史跡地周辺における縄文時代晩期の植生

これまでに行われた低地部の調査では、多量の自然木や炭化材、木製品、種実遺体が出土している。種実遺体はオニグルミ、クリ、ムクロジの3種が確認され、自然木は、樹種同定の結果、落葉広葉樹のハンノキ属ハンノキ亜属とクリが確認されている。また、木製品としてヒノキとヤマウルシ、樹種不明の用途不明製品3点が出土している。

史跡範囲のほぼ中央、方形配石遺構と合口土器棺墓の中間部にあたる、第121地点の調査では、縄文時代晩期の遺物包含層を対象に、微粒炭分析、花粉・植物珪酸体分析及び種実遺体分析等を行い、史跡周辺における縄文時代晩期の植生の復元を試みた。

炭化種実は、堅果類のオニグルミの核と栽培種のイネの穎が同定された。オニグルミは、高木化する落葉広葉樹で、川沿いの湿潤な肥沃地に生育する河畔林要素を含む植物である。また、オニグルミは、核内部の子葉が食用可能で、収量も多く、長期保存も可能な有用植物であることから、食料残滓か燃料材として利用された可能性が考えられる。なお、イネは、弥生時代に栽培のため持ち込まれた植物質食料としての渡来種とされるため、後代に混入した可能性が高い。

微粒炭の母材として認められた種類は、マキ属、モミ属、マツ属、スギ属などの針葉樹、コナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹、コナラ属アカガシ亜属などの常緑広葉樹に由来する花粉が認められ、これらは周辺の山野や二次林などを構成する要素であることから、当時の森林植生を反映していると考えられる。また、他に検出されたハンノキ属、ニレ属一ケヤキ属、エノキ属一ムクノキ属などは河畔や溪谷沿いに生育する種を含むことから、多摩川などの河川に由来する可能性がある。一方、草本類ではイネ科、カヤツリグサ科、アカザ科、バラ科、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ科など、開けた明るい場所に生育する種類が認められ、当時の草地植生を反映していたと考えられる。

植物珪酸体分析では、メダケ属を含むタケ亜科の多産が見られている。タケ亜科は他の種類よりも同分析において残留しやすいことが知られているが、晩期包含層の形成過程でタケ亜科が生育していたと考えられる。なお、段丘下の低地部では、ネザサ節を含むタケ亜科メダケ属が産出している。この他に、ススキ属やイチゴツナギ亜科、シバ属の生育も想定される。

このほか、出土した晩期土器約11,400点の種実圧痕分析を実施したところ、土器片16点からケヤキ種子や堅果類果皮等の圧痕が確認されたが、穀物栽培をうかがわせる資料は確認されなかった。

以上の点から史跡周辺における縄文時代晩期の植生を復元すると、ハンノキ等が生息する河畔林、湿地林が広がっていたと想定される。